



禁止されるとやりたくなる

パチパチパチパチ。

平日はたいてい少し早起きして、リビングで読書をしたり執筆をしたり。

今朝も、コーヒーを飲みながら原稿を一人で書いていた時のことでした。

6時前くらいになると、子供たちが順々に目をこすりながら起きてきます。

その4人兄弟姉妹の末っ子（年中児）が、起きてきた後に「幼稚園に行きたくない」とリビングで駄々をこねはじめました。

私は、イヤイヤ言っているその次男を見ながら、作戦を考え始めます。

ちなみに、「行きたくない」と言い出したのは毎日のことではなく、久しぶりのことでした。

先々週あたりに、どうも同じ組の子からラブレターのような手紙をもらったらしく、それが追い風になったのか、ここしばらくは楽しそうに幼稚園に通っている姿が続いていました。

それが打って変わって今朝の行き渋りです。

さて、どうしようか。

まず、「行きたくない」にも色々なパターンがあるので、次男の様子をひとまずじっくり見てみることにしました。

激しく泣くわけでもなく、怒り出すわけでもなく、「なんとなく気乗りしない」という表現が最も近い様子です。

そんな時もあるよなあと思いながら、私はおもむろに次男の幼稚園の帽子を持ってきてそれをかぶりました。

そして、何食わぬ顔でパチパチと執筆を続けてみました。
異変にすぐ気づいた次男は、すぐに私の所に向けよって来ました。
そして、「帽子はぼくの！」というのです。
私は、「え、今日行かないんでしょ？」と返しました。
続けて、「だから、今日はお父さんが幼稚園に行くね」と伝えたのです。
次男はすぐさま、「だめー！！」と言いました。
帽子は僕のもので、幼稚園に行くのも僕だと主張し始めます。
そして、私の頭から帽子をとっていき、元あった場所に片づけました。
私はそのあと、次男の目をかいくぐりながら何度かその帽子を奪還するべくチャレンジを続けました。
その度に次男は「だめー！！」と通せんぼをします。
ついには、往年のシジマールのように大きく手を広げて私の行く末を阻み始めました。
最終的にはらちが明かないと思ったのか、「帽子をかぶって死守する」という強硬手段に出ます。
私は次に、制服を狙うことにしました。
次男はその動きにも気づいて、また決死のブロックを試みます。
私はここで声をあげました。
「お父さんは、幼稚園にいきたい！」と。
次男もすかさず声をあげました。
「だめ！絶対ダメ！お父さんは学校行って。幼稚園は〇〇行くの！」
こんなやり取りをしながら、制服を狙ったりズボンを狙ったりしている最中に、私はトイレに行くことにしました。
すると、外からお姉ちゃんたちの声が聞こえてきます。
「早く！今のうちだよ！チャンスチャンス！」
少したってからトイレから出てリビングに戻ると、ニコニコしながら次男がすべての着替えを済ませて私を待っていました。
素晴らしい連係プレーです(笑)
私は、がっかりした表情で「ああ幼稚園に行きたかったな…」と再びコーヒーを飲み始めました。

と、今朝我が家で実際に起きたことを描写してみました。

今朝のやり取りが面白かったので、今度は次男が起きてくる前から幼稚園の帽子をかぶってリビングで執筆をしておこうかなと考えているところです。

先日紹介した「A させたいなら B といえ」は色んな所に応用が可能でして、この日も実際は幼稚園に行ってほしかったのですが、私がある場で選んだのは「幼稚園に行くのを邪魔する」という選択肢だったというわけです。

もちろん、これが最適解というわけではないですし、全てのパターンに当てはまる万能な答えでもありません。

次男の日頃の様子を見ながら、単純に気乗りしない朝にまともに相手をするのではなく、変化球で対応してみようと考えてみただけのお話です。

こんな風に見てみると、「子どもたちが望むものを全てそのまま与えるのではなく、渡し方を工夫するだけでも意欲や熱量を生むことができる」ことが分かります。

昨日は、社会科の時間に見事全員が「四国地方」を覚えることに成功し、そのお祝いとして「桃太郎電鉄・教育版」の 1 回プレイ権が付与されました。

ささやかなご褒美のように感じるかもしれませんが、子どもたちは狂喜乱舞しました。

飛び跳ねて、互いにハイタッチを交わし、喜びの雄たけびを上げていました。

この桃太郎電鉄・教育版を、最初から「やりたい放題」にすることは、別に難しいことではなく、むしろ簡単なことでした。

けれど、あえてそこに一つの制約を設けたのです。

「一つの地方を全員が覚えてテストに合格した時に、1 回プレイすることが可能になる」のように。

全員で力を合わせて課題を乗り越えた喜びもあいまって、桃鉄のプレイが可能になった時の喜びはひとしおのようでした。

そして、次なる課題である「中国地方の暗記」にも子どもたちはものすごい意欲でもって取り組もうとしています。

このつながりというわけではありませんが、今週から子どもたちと相談して「ノーiPadデー」というものを設けてみることにしました。

これも、一つの制約と言えるでしょう。

でも、子どもたちは全然後ろ向きだったり、不満がる様子も皆無で、むしろこの1日をどう楽しもうかと考えて行動する姿が至る所で見られました。

先日の「不便さの中にある豊かさ」の話同様に、「思い通りにいかない中にある創り出す喜び」もまた確かに存在すると思うのです。

もちろん、こうした一つ一つの制約を考える際にも、子供たちとの「対話」は欠かすことができません。

ノーiPadデーとして設定した水曜日のことも、クラスのみennaとアイパッドの良さやリスクについてしっかり話し合った中から出てきた前向きなアイデアであるという点がとても大切です。

禁止されると俄然やりたくなったり、不便さの中に豊かさを見出したり、制約があるとその中に色々な楽しみが生み出せるようになったり、人の感情や心理とは実に面白いものですね。

不便益という言葉や、カリギュラ効果という言葉をはじめ、こうした先行研究や心理学の知見は教育者として見逃すことができません。

単純にすべてのものを使い放題・やり放題にするのではなく、どのように仕組みを作ったり渡し方を工夫することが子どもたちの熱量や意欲につながるのか、これからも考え続けていきたいと思います。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

